

時之島の熊野宮とは（１）

熊澤 良嗣

熊野宮とは聞き慣れない神社の名前である。加えて、宮と言えはお社^{やしろ}があつて神話に登場する神が祀^{まつ}られているものだが、熊野宮にはそれらが無い。しかし、この宮には南朝系にゆかりのある王子が祀られているという伝説がある。

時之島の南西部にある森に囲まれた八幡社^{げんそ}と玄曾墓地^{げんそ}の間に、熊野宮はひっそりと存在している。お社は見られないが、宮の入口に「熊野宮信雅王御塋墓^{のがまきあう えいぼ}」と刻まれた大きい石柱が立っている。そしてその奥に玉垣に囲まれた檜の大木があつて、枝分かれした根元の部分にステンド細工の傘のようなものがあり、その下に縦長の自然石が１つ置かれている。これが「熊野石」と称されるもので、熊野宮信雅王の埋葬地（御塋墓）の印である。

玉垣の外周にはいくつもの構築物がある。正面には一対の石燈籠と石の花立て、北側には一基の五輪塔、南側には熊野宮とその子孫を諷^{うた}った平らで大きな石碑が立っている。すべてに寄贈者の名前と建立年が刻まれているので、昭和30～50年代に作ったこと、贈ったのは基本的に二人で、両者とも熊澤姓であることが分かる。

時之島で聞き取り調査をしたところ、この二人は名古屋や東京に在住した熊澤姓の人であつて、明治の末頃、この地を熊野宮信雅王の陵墓と認定してほしいと宮内省に上奏した熊澤大然^{ひろしな}（住所は大阪）、その養子息子が戦後になって、自分は南朝の末裔であると運動して話題になった熊澤寛道^{ひろみち}（熊沢天皇・当時の住所は名古屋）の血筋に当たる人たちであるようだ。いずれにせよ、彼らの祖先が時之島の出身であることは確かである。

そこで熊野宮は彼らの作り話だろうと一笑に付す人が出てくるわけだが、かつて京都大学の西田という先生が調査に訪れたとか、賀陽宮^{かやのみや}という皇族の軍人が熊野宮の参拝に訪れ

たという事実もあるので、少し史実を探ってみたい。

天保12年(1841)、文久3年(1863)の時之嶋村絵図を見ると、現在の八幡社の部分は白い四角形の中に「八幡宮三社、三反七畝十歩御除地」と書かれ、その北側に白い長方形が2つ描かれ、一方に「村除三畝」、もう一方に「墓」と記入されている。

「墓」と記入されている方は今の玄曾墓地に相当し、「村除三畝」と記入されている方が熊野宮に相当する。(尚、絵図では玄曾は「源曾」と表記されている。)

「除」は「除地」と同じで免税地のことであるから、「村除三畝」とは、この三畝の土地を時之嶋村の所有地と認めて免税扱いにするということである。「除地」は神社・寺院・家格の高い庄屋などに付与された特別措置であったから、「村除」というのは極めて珍しいと言わねばならない。

また、明治17年の地籍図で^{あざ}「玄曾」の部分を見ると、熊野宮に当たる土地の真ん中は、小さい四角の中に「四十六番・塚」と書かれ、長方形の周囲は「四十五番・用材林」、北の玄曾墓地の部分は「四十四番・埋葬地」とそれぞれ書かれている。

以上から、熊野宮の土地は由緒のある場所と考えられていたことが推測できる。

現在、玄曾墓地でも熊野宮に近い南半分には熊澤家と刻まれた墓石がたくさん並んでいる。これは、信雅王が熊澤現覚と名前を変えて南瀬部(時之嶋)に落ち延びて身を隠し生涯を閉じられた。子孫や家来は宮の傍らに自分たちの墓を作り守った、という伝説を物語っているように見える。熊野宮の名は熊澤大然が言い出したものらしく、それ以前は無名の宮だったのである。

そのお墓の真ん中に棺を置く蓮台があって、「寛政七乙卯十一月、源宗山、丹羽郡時之嶋

村、同行中若者建之」という文字が刻まれている。

ここに「源宗山延命寺」という寺があって、熊野宮の霊を密かに弔っていたという伝説のなごりである。他聞をはばかり寺だから、ことによると「源宗山延命寺」は架空の寺だったかも知れない。「延命寺」という名前が刻まれていないのは、そういう理由によるのかも知れない。

ところがまた、「延命寺」は名前を変えて、宝永年間（1700年初め頃）に美濃国の武儀郡しもうち下有知に移転したという話がある。南朝、とりわけ後南朝の研究に長く携わっていた作家の中には、実際にその寺を訪れて取材したことを書いている人がいるから、延命寺が移転したという話しを作り話と片付けるわけにはいかないだろう。

熊野宮を単に近年の創作だと断言することはできないようである。



真ん中上部に「源宗山」と刻んである